世間解　第三九九号
令和三年　五月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―如来さま―

五月になりました。さわやかな季節であります。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

“如来さま”ということを思うのであります。“阿弥陀さま”のことを“阿弥陀仏”と申しあげたり“阿弥陀如来”と申しあげたりするのであります。

「仏」とは「ブッダ」というインドの言葉の音にあわせて「仏」という字をあてたものとお考えいただいてよいと思います。「ブッダ」とは“目覚めた方”という意味で“お覚りをひらかれた方”という事であります。

私は、エエの、悪いの、好きの、嫌いの…というてそこから色々と煩っているという迷いの世界におります。で、時々はうれしいことや楽しいこともありますから「まぁええわ」いうてその迷いを迷いとも思わず迷いから離れられずにおるのであります。その私の迷いの世界の真反対であるお覚りの世界を「真如」とか「一如」という言葉であらわします。

真如はすなはちこれ一如なり。しかれば、弥陀如来は如より来 生して、…

種々の身を示し現じたまふなり。

これは親鸞聖人のお言葉であります。阿弥陀さま“如”という覚りの世界からそのお徳を私たちに伝え、私たちをその覚りの世界に導くために色んな身となって色んなご縁となってくださるのであります。

〈如より来 生して〉くださるこれが“如来さま”であります。

阿弥陀さまは“どこか遠い所から私を護り支えてくださっているお方”ではなくて“時には楽しいこともうれしいこともあるけれども、日暮らしの中で色んな事に怯え、悩み、煩ってゆかねばならない”今の私のところに“如来”してくださっているお方なのであります。

いはんや仏に帰し、法に帰し、僧に帰する人には、一切の神王、恒沙の鬼神を眷属として、つねにこの人をまもり給ふといへり。しかればかくのごときの諸仏・諸神、圍繞してまもり給はんうゑは、又いづれの仏・神かありてなやまし、さまたぐる事あらん。又宿業かぎりありて、うくべからんやまひは、いかなるもろもろのほとけ・かみにいのるとも、それによるまじき事也。いのるによりてやまひもやみ、いのちものぶる事あらば、たれかは一人としてやみしぬる人あらん。

これは法然聖人のお言葉です。思い切って意訳をすれば、

『阿弥陀さまのご本願に遇い、お念仏申しながら生きる人にはあらゆる諸仏や神々がその人を護り支えてくださっているのです。決してその“いのち”を悩ませることはなさいません。しかし、縁の中ではどのようなことにあって行かねばならないかわかりません。たとえ諸仏・諸神に祈ったとしても縁の中では病気にもなり、ケガをすることもあるでしょう。祈ることで病気が治ったり命が延びたりするようなことが若しあるとすれば、この世に病気をする人や臨終を迎える人は一人もいないでしょう。』というようなことになりましょう。

これが私が“いのち”恵まれている娑婆の本当の相であります。困った時、苦しい時、何かに縋らずにおれない時、私たちの心は弱くなります。その弱い心を強くしていかねばならない等という怖ろしげな教えではありません。

こういう娑婆の中に“いのち”恵まれてなにがしかの願いを持つ私を決して途切れることなく私の願いより先に願い続け支え続けてくださっているおはたらきがあるのです。

私の口から出てくださる“なもあみだぶつ”がその証拠です。

阿弥陀さまやご往生くださった方々は何時でも、何処でも、決して離れずに弱い心の私と一緒に居ってくださっておるのであります。

お念仏さまの「なんまんだぶ」という響きの中に「あぁ、阿弥陀さまや先立たれた方が私を支えてくださってんねんなぁ」と阿弥陀さまやご往生くださった方々に願われている“いのち”を助けられ助け合いながら大切に大切に生きる。ただそれだけなのであります。

合掌